

## N 氏邸訪問記(2017.9.5)

### 1. はじめに

N 氏とは、さる試聴会でご面識を得て、その後も交流を続けさせていただいています。今回、お誘いをいただいたので、M 氏とともに訪問させていただきました。

### 2. N 氏邸のシステムの概要

N 氏邸のシステムはステレオサウンド誌 2007 年 164 号 P403 の菅野沖彦氏によるレコード演奏家の訪問記事にもなったハイエンドの極致といってもよいシステムです。スピーカーはテクニクスの SB-M10000 でテクニカルブレインのアンプで駆動しておられます。N 氏はテクニカルブレインを訪問されてこのスピーカーを知り、同時にテクニカルブレインのアンプの購入も決められたとのこと。テクニカルブレインには当方も通っていたことがあって、[9月6日の研究室日誌](#)にその次第を記載しています。

テクニクスの SB-M10000 はテクニクスの開発した超ド級スピーカーで、N 氏はこれに村田製作所のスーパーツイーター ES-103B を加えておられます。

<http://audio-heritage.jp/TECHNICS/speaker/sb-m10000.html>

<http://www.technics.com/global/chronicle/sb-m10000/>



閑静な住宅街にあるリスニングルームはステレオサウンド誌のレコード演奏家の記事の写真のおおりで、天井も高く、傾斜がついており、定在波ができにくいという、うらやましい環境です。

アンプはテクニカルブレインのプリアンプ TPC-Zero とパワーアンプ TBP-Zero を使用され、デジタルプレイヤーは、トランスポートが ESOTERIC のグランディオーソ P1、DAC がモノブロックの ESOTERIC のグランディオーソ D1×2 です。

さらに、Rb クロックジェネレーターの ESOTERIC の G-0Rb を使用され、クロックを DAC に供給されています。

氏の言によれば、CD も突き詰めれば、コンサートホールの雰囲気をも十分に再現できるし、そういうことから現状ではハイレゾには興味をもっておられないということでした。

CD の音質向上の補完の一つが、ステレオ誌 2004 年 10 月号 P156 のナノテックシステムズ主宰の濱田氏への村井裕弥氏による音匠列伝インタビュー記事でも紹介されたナノテックシステムの NESPA プロフェッショナルの活用であり、その効果を確認することも訪問の目的でした。

### 3. N 氏邸のシステムの試聴経過

試聴は NESPA 処理効果の有無を交互に確認しながら進行了しました。

最初は女性合唱ですが、NESPA 処理なしでも、難しい合唱が水準以上のクオリティで聴かせてくれますが、処理により、伴奏のピアノの実在感の向上、ステージ感の向上、合唱の構成人数までが分かるようになってきます。さらに処理を追加すると、合唱のハモリ具合が明確になってきます。

当方のリクエストで、当方も所有している、レコード演奏家の記事で使用された諏訪内晶子のシベリウスを聴かせてもらいましたが、ストラディバリウスの澄んだ音とバックの木管の質感がよく出ており、処理によってストラディバリウスの音の透明感が上がってきます。

次に、美空ひばりはどうかということでしたが、処理によって、声が明晰になり、細かいビブラートまでが分かってきます。

M 氏が持参された 1887 年製作の NY スタンウェイのフォーレでは、NY スタンウェイらしさが上品に再現され、M 氏宅で聴く、弦の震えまで見えるようなリアルな音とは違った魅力がありました。

当方が持参した、シュタルケルのバッハの無伴奏チェロ組曲の SS 誌のリマスター CD 盤では、M 氏の提案でチェロの機種が違う 1 番と 4 番を比較しましたが、音色の違いがよくわかり、処理によって、ともに音が柔らかく響きが豊かになって落ち着いた雰囲気になりました。

N 氏は学生時代はアマチュアオーケストラでバイオリンを演奏され、現在も男性合唱団に参加されており、学生の男性合唱を 2 枚続けて聴かせていただきました。氏によれば、ホールの違いまでよく分かるとのことでした。処理を行いますと、ともに音圧が上がったようになって、声の協和と分離が向上しました。

M 氏の持参されたラベルのスペイン狂詩曲では、CD と SACD シングルレイヤーの聴き比べを行いました。SACD はハイレゾらしい音が分かり、処理によって金管の質感が明晰になりました。

最後に持参した、6月に演奏を聴いてきたクリーザーのハイドンのホルン協奏曲を聴かせてもらいましたが、処理の効果が歴然で、バックの明瞭さ、再生が難しいホルンの質感がはっきりとわかるようになりました。M氏は音が割れるようなところがあると指摘されましたが、クリーザーは両手がなく、片足だけで演奏していますので、ホルンの開口部に手をいれて調音する通常のテクニックが使えないことに由来するものと思われ、こういった演奏技法の問題まで指摘できるようになったということになります。

#### 4. まとめ

N氏のシステムは、一言でいうと、システムの構成機器がうまく調和され、リスニングルームの環境にも恵まれて、ステレオサウンド誌のレコード演奏家の記事の中で、訪問者の菅野沖彦氏との対談にあるように、音楽指向のオーディオであって、いわゆるオーディオマニアにありがちな音中心に興味をおいたオーディオではないことが分かります。

N氏はアクセサリやケーブルや細かいチューニングには凝られていないようですが、NESPAだけは特別で、その効果は上記のとおりですが、その効果が十分発揮されていることが分かる、個性が強くなく反応の良いシステムのベースがあつてのことだと思えます。

以上